

## 2013 年ケベック・スタージュ報告

### およびウーク・チョング『コリア三部作』を題材に した授業実践の試み

片山 幹生

**KATAYAMA Mikio**  
Université Waseda  
mikiokat@gmail.com

#### 1. 2013 年度ケベック・スタージュの概要

2013 年のケベック・スタージュは 7 月 29 日（月）から 8 月 15 日（金）の三週間にわたってモンリアル（モントリオール）大学で行われた。今年度は日本からは日本フランス語教育学会の推薦で 6 名（大学教員が 3 名、高校教員が 3 名）の参加があった。日本フランス語教育学会から推薦された研修者に対しては、ケベック州政府が宿泊費およびスタージュ受講料、空港から宿舎までの交通費を負担した。その他、食費補助として 300\$CA が支給された。この他、韓国から 3 名、ラオスから 2 名、英語圏カナダから 5 名、関西でフランス語教員をしているケベック人 1 名の合計 17 名がこのスタージュに参加した。スタージュは月～金に行われ、午前中 3 時間がフランス語教授法に充てられた。午後はケベックの文化・社会・歴史・言語などをテーマにしたアトリエが 6 回開催された他、植物園、モンリアル旧市街などの遠足も行われた。また一週目の 8 月 3 日（土）にはケベック市への日帰りガイドツアーが催された。最終日の 8 月 15 日（金）にはモンリアル市内のフランス語レストランで昼食会があり、修了証の授与もそのレストランで行われた。

前半に個人課題、後半にグループ課題の二つの課題が出された。個人課題は「document authentique を利用した聴覚教材を使った授業プランの作成」だった。課題は電子メールで講師に送り、講師からはフィードバックがある。大学内に PC の設備はあるが使用時間が限られているため、研修には PC を持参するのが望ましい。グループ課題は 3 人組で行った。課題の指示は「25 分間の授業プランを作成する。document authentique を使ったテキストを読む授業を行う。各メンバーが平等に授業

に関わること。作業の内容をまとめたレジュメを作成し、提出すること」だった。研修者はそれぞれの教育対象ごとにグループを作った。

私にとってのケベック・スタージュ参加の最も大きな収穫は、モンREALとケベックを体験することで、フランス（パリ）中心のフランス語観から解放されたことだ。モンREAL、ケベックの豊かさや美しさ、そこでフランス語を話す人たちの優しさ、そしてカナダの多文化社会がもたらすダイナミズムに、私はすっかり魅了されてしまった。ケベック・スタージュによって、私ははじめてフランス語圏文化の多様性を実感することができたように思う。またスタージュのグループ課題では、私は韓国人、ケベック人の大学教員と協同作業を行ったのだが、その協同での準備作業中の忌憚のない意見交換が、そのまま異なる文化を背景とする者同士の合意形成の難しさを学習する場となり、自身のフランス語教育のやり方、考え方を再検討するきっかけとなった。

### 2. ウーク・チョング『コリア三部作』について

ケベック・スタージュのグループ課題では、私は韓国人とケベック人の大学教員と組んで、模擬授業を行った。われわれ三名が教材として選択したのは、モンREAL在住の韓国系ケベック人作家、ウーク・チョングが2012年に出版した『コリア三部作<sup>1</sup>』の冒頭部抜粋である。

私は朝鮮系の家庭に生まれた。しかし私は朝鮮語を話すことができない。私は日本で生まれ、私の母語は日本語である。日本では私はノボルと呼ばれていた。しかし2歳の時にカナダに移住したため、日本語は私の第一言語とはならなかった。48歳になった今、私はフランス語で文章を書いている。しかし私は自分の意志でフランス語を選んだわけではない。自分が置かれている状況ゆえにフランス語で書かざるを得なかったのだ（冒頭部拙訳）。

Je viens d'une famille dont les origines sont coréennes. Cependant, je ne parle pas le coréen. Je suis né au Japon, et le japonais est ma langue maternelle; là-bas on m'appelait Noboru. Mais cette langue a cessé d'être ma langue première après mon immigration au Canada à l'âge de deux ans. Aujourd'hui, à quarante-huit ans, j'écris donc en français plus par la force des circonstances que par choix.

À la veille du grand départ pour le Canada, mon identité linguistique aurait pu s'orienter vers le coréen ou le japonais ou encore vers une autre langue. Dans les faits, toutefois, ce choix a été fait par-dessus ma tête par mes parents et, d'un point de vue macroscopique, par des facteurs historiques et socioéconomiques. Je ne peux pas dire que j'ai *choisi* le français. En ce qui me concerne, c'est un simple cas de déculturation. Le français est ma langue d'adoption, mais n'est-il pas plus juste de

---

<sup>1</sup> Ook CHUNG, *La Trilogie coréenne*, Montréal, Boréal, 2012. 冒頭部3章の抜粋は <http://www.entrepotnumerique.com/o/18/p/14493/excerpt> でダウンロード可能。

dire que c'est elle qui m'a adopté, comme des parents adoptent un orphelin sans son consentement, avec des résultats plus ou moins heureux ?

Quand nous sommes arrivés au Canada, mon père aurait pu nous installer dans une province anglophone, mais il a choisi le Québec justement parce qu'on y parle le français. Il y tenait mordicus. Pourquoi ? Parce que, en Asie, pour les gens cultivés de sa génération, le français a longtemps représenté une langue de prestige, beaucoup plus que l'anglais. C'était la lingua franca des intellos, une langue charismatique où coulait l'encre de Gide, de Camus, de Malraux, de Mauriac, d'où se dégageait le parfum de la Sorbonne... À l'université Yonsei où il avait étudié (en mathématiques), il avait choisi comme option de langue seconde (obligatoire) le français. Il avait cru qu'en ayant des notions de français il pourrait rapidement s'adapter au Québec.

En revanche, je puis dire que j'ai choisi de faire du français ma principale occupation professionnelle. Si j'écris en français, ce n'est pas tant parce que je trouve la langue française belle que parce que j'ai « quelque chose à dire ». Et, paradoxalement, ce que j'ai à dire est ma condition d'exilé. Je parle, je pense, j'existe dans une langue « accidentelle », et si je suis devenu écrivain, c'est encore par accident. Le métier de conteur est l'héritage que j'ai reçu de ma condition d'être en-exil.

Peut-être devrais-je me montrer plus reconnaissant envers ma langue d'adoption ? J'ai enseigné le français comme langue étrangère en Corée du Sud pendant trois ans et comme langue seconde au Nouveau-Brunswick pendant un an. C'est ma langue alimentaire. Celle qui me permet de vivre et de gagner de l'argent. Même si c'est pour acheter et manger du *kimchi*.

私は研修中にこの小説をたまたまモンREAL大学内の書店で見つけた。日本生まれでモンREAL在住の朝鮮系ケベック人という複雑なアイデンティティを持つウーク・チョングは、この都市の多文化状況を象徴する存在である。言語をめぐるアイデンティティが問題となっているこの小説は、このスタージュの模擬授業で扱うには格好の題材であるように私には思えた。そして今回のスタージュには、チョングの小説で問題になっている日本と韓国とケベックの研修生が揃っていた。私は韓国人とケベック人の研修生に声をかけ、3人でこのテキストを題材とした講読の授業モデルを作ることを提案した。以下に示す授業プランは、スタージュでの模擬授業の内容をベースにしたものである。

### 3. 『コリア三部作』冒頭を教材とした講読授業プラン

【対象】B1レベル。大学等で200時間（週4コマで一年間）以上、フランス語を学んだことのある学生。

【想定時間】90分授業で3回分。

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

---

【教材】 ウーク・チョング『コリア三部作』第一部『Diasporama』の冒頭部。Ook CHUNG, *La Trilogie coréenne*, Montréal, Boréal, 2012, p. 13-15 (I. *Diasporama* : « Soie chinée et ombres chinoises »)

### 【学習目標】

- ・ テクストを正しく音読できるようになる。
- ・ 講読によって語彙・表現の拡大、文法事項（半過去、大過去、条件法、ジェロンドイフ）の確認を行う。
- ・ テクストの内容を把握し、内容についての設問に答えることができるようにする。
- ・ テクストの講読を通じて、民族的アイデンティティ、母語と外国語の関係の問題について考察する。
- ・ フランス語文化圏としてのケベックの特徴を学ぶ。
- ・ 多文化社会としてのモンREALのあり方について学び、現在の日本における多文化・言語状況について考える。

### 【授業プラン】

#### 1. テクスト講読前

- a) 授業概要の説明、資料の配付（テキスト抜粋、設問、語彙と文法説明）
- b) ケベックのフランス語、モンREALについての資料の提示（地図、写真、映像などで）
- c) 小説単行本の表紙および扉ページを見せる。書誌情報の読み取り方を学ぶ。語彙の学習。質疑応答で書誌情報を正しく読み取れているかどうか確認する。

設問例：

- a. 作者名は？ 作者の国籍はどこだと思いますか？
- b. 作品のタイトルは？
- c. 出版社は？
- d. 作品のジャンルは？
- e. 作品タイトルと章タイトルからどんな内容を想像しますか？

#### 2. テクスト読解

- a) 最初の読み：まず大まかに読む。わからない語句や気になる語句に下線を引かせる。語彙と表現の確認をする。4人グループを作り、グループ内でパラグラフ毎に順番に音読させる。
- b) 2回目の読み：登場人物の特定。第1、第3、第5パラグラフをグループ毎に割り当て、設問に答えさせる。一文ずつグループ内で音読させてから、討論によって答えを導き出す。

設問例：

- a. 第一段落の内容から「je」の《性別》、《年齢》、《出生地》、《言語》、《職業》、《学歴》を答えなさい。またあなたは「je」はどういう人間だと思いましたか？
- b. 第三段落の内容から「il」の《性別》、《年齢》、《出生地》、《言語》、《職業》、《学歴》を答えなさい。またあなたは「il」はどういう人間だと思いましたか？
- c. 第五段落を読んで、もう一度「je」の人物像についてわかったことを答えなさい。

c) 3回目の読み：第2、第3、第4–5パラグラフの再読。前回とは異なるグループに割り当てて、設問の回答を考えさせる。

設問例：

- a. 第二段落について以下の設問に答えなさい。
  1. Pourquoi le narrateur écrit-il en français ?
  2. Est-ce que le narrateur a choisi le français ?
  3. Qui choisit le français ?
  4. A votre avis, qu'est-ce que ça veut dire la « langue d'adoption » ?
- b. 第三段落について以下の設問に答えなさい。
  1. Pourquoi le père a-t-il décidé de s'installer au Québec ?
  2. Pourquoi le père a-t-il étudié le français ?
  3. Quels mots sont utilisés pour décrire le français ?
- c. 第四、五段落について以下の設問に答えなさい。
  1. Comment le narrateur décrit-il la langue française dans les paragraphes 4-5 ?
  2. Qu'est-ce que ça veut dire la « langue alimentaire » ?

### 3. テキスト講読のあと

- a) 内容についての全体的な質疑応答、討論（グループ内で話し合った後、グループ毎にその内容を発表させる）
  1. この小説のジャンルは？
  2. この抜粋から引き出せるテーマは何か？この抜粋でレポート、発表を行うとすればどのような「問い」を立てるか？
- b) テキスト外の事象への発展
  1. ケベックとモンレアルの多文化主義についての補足説明
  2. この抜粋とテーマが重なる文学、映画、演劇作品について学生に調査・報告させる。
  3. 日本、東京における多文化共存のありかたについて学生に調査・報告させる。